

知育に思う

福武哲彦教育賞を受賞して

岡山県青少年総合相談センター所長 佃 幸男



論壇をにぎわした学力論争は、学校の本質は何か、特に近代の学校が中心的役割として掲げてきた知識の継承・伝達の部分をどうするかというところに根本的な争点があったように思います。この論争は指導要領を「学力重視」の方向に軌道修正することで一応の決着をみたようです。しかし、「ゆとり教育」が登場した背景には、「知育偏重」の論議があったわけですから、知識の継承・伝達の部分、すなわち知育のあり方についてよく検討しなければ、振り子はまた元に戻る可能性があります。日本近代教育史のある面での特徴は、一貫して教育の危機が叫ばれ、知育偏重と徳育強化が主張されてきたことです。「知育偏重」という言葉には、現在の教育は知育だけを重視しているから、これを是正して知・徳・体の均衡ある発展と調和を目指さなければならぬという考え方が前提にあるようです。ただし、こ

の前提は、「知育偏重」の欠陥を是正するための処方箋を、誤って「知育軽視」に求めることになりかねません。今の日本における教育の必要な改革の処方箋は、真の知育とは何かをしっかりと議論し、知育を重視する方向で考えることにあるのではないのでしょうか。例えば、国語教育の第一歩は、日本語を的確に読み、正確に書き、表現力豊かに話すことができるよう指導することです。単なる仮名や漢字の暗記だけでは真の知育とは言い難く、一つ一つの言葉の意味を本当に深く理解し、これを見事に使いこなす能力を身につけさせることが知育であり、豊かな言語感覚は豊かな情操を育み、徳育ともなります。もしも、知育偏重という場合の知育が、受験勉強における暗記物などを念頭においているのであるならば、そのような貧弱な意味に知育という言葉を用いる傾向こそ、改められるべきであると考えます。



普通教室でITを自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成！

平成15年度教育研究助成
岡山市立西小学校
教諭 西森 美加

コンピュータやデジタルカメラなどのIT機器が身近になり、家庭生活だけでなく学校現場へも積極的にITが取り入れられるようになってきました。私が教員になった頃には考えもしなかったことです。

西小学校では数年前から、コンピュータ室だけでなく、普通



普通教室でITを使った授業(1年生)

教室でコンピュータやプロジェクトタ等を活用した授業の研究を行っています。このような中、教育研究助成をいただき、感謝しております。

さて、本年度は一年生を担任していますが、国語科や生活科などの学習にITを取り入れていきます。自分の育てている花の成長の様子を子ども自身がデジタルカメラで撮影し、画像を使って発表をしたり、プロジェクトで映した挿絵の順番を変えながら、教材文の内容にせまったりしています。

最初にプロジェクトを使って画像を映したときには、「すごい。」「とか「幼稚園にもあったよ。」などの反応が返ってきましたが、たびたび使っていました。うちに、教室内でITを使うことは、子どもたちにとって当たり前のことになってきたと実感しています。

今後、教育におけるITの活用がさらに充実することは必ずです。今後も普通教室内での多様なITの活用方法を探り、情報活用力をしっかりと身につけた子どもを育てていきたいと考えています。

もう数年前になる。初めての中欧の旅で、ハンガリーとスロバキア国境近くにある古い大聖堂を訪ねたことがある。全長2900キロ、南ドイツの「黒い森」で知られる大森林地帯から流れ出た大河ドナウは中・東欧を貫くように東進して黒海に注ぐが、その流れは大聖堂のある「ドナウ曲がり」で大きく向きを変え、ハンガリーを両断するように南下する。「ドナウ曲がり」の切り立つような河岸から見下

ハンガリー人の呼称がフン族から取られたものであり、人種的にも、言語的にも、れっきとしたアジア系民族であることも学んだが、かつてフン族やモンゴル人が駆け抜けたユーラシア大陸への興味が膨らんだのも、あの中欧の旅の大きな収穫だった、と思っている。

その視点から「9・11」以後の世界の動きを見ていて、改めてグローバル・サイズで欧米本位の世界史像を見直していく必

挑戦だが、いざ具体化するとなれば、文化とは何か、の原点からきちんと考え直すことと意識転換が欠かせない。

東大名誉教授の木村尚三郎先生は近著「ヨーロッパ思索紀行」で「2030年といえは、日本の子どもたちが、社会の中心として活躍している時代です。そのころから2350万平方キロ、人口3億8000万人の北アメリカの優位が崩れ、4900万平方キロ、45億人のユーラ

随想 瀬戸内から東アジアへ

福武文化振興財団副理事長 小寺 聡



ろすと、はるか下方にゆったりとヨーロッパ第二の大河が流れていた。

ドナウは太古から現代にいたるまで民族興亡の歴史の舞台といわれる。とくにハンガリーは五世紀ごろから再三、東方からのアジア系民族「フン族」の侵入を許し、13世紀半ばにも騎馬民族国家モンゴルの大軍が襲来した。「ドナウ曲がり」ではローマ帝国やオスマントルコなどの侵略跡も含めて歴史を凝縮した遺跡が数多く発掘されている。

要性を痛感させられているこのごろである。

いま、財団内部では教育、文化両部門の活動の在り方について基本問題検討委員会で見直しの検討を進めている。最終答申を来春までにまとめる計画だが、特に文化財団では新たに「瀬戸内海圏域、日本、近隣アジア諸国」を視野においた活動などへも助成を広げることが検討されている。福武理事長が提唱している「瀬戸内から東アジアへ」の構想を踏まえた新しい課題への

シアが、悠然とその巨大な姿を世界に浮上させてくる。中心は中国とロシア、EU諸国、そして「うまくいけば」日本です。その「うまくいけば」とは、私たちの意識の大転換がうまく成功すれば、という意味です」と説いている。

重い課題である。

今年、生誕百年を迎える彫刻家イサム・ノグチ(1904-1988)。彫刻・舞台美術・プロダクトデザインといった多岐にわたる活動とともに、彼の事績は世界中あらゆる地域に及んでいる。日本でも複数の地に足跡を遺しているが、香川県牟礼町は、晩年住居とアトリエを構えた場所として特に有名である(現 イサム・ノグチ庭園美術館)。そのノグチが岡山とつながりをもったのは、実は牟礼町以前のこと。昭和27年に備前焼に没入し、32年から晩年にかけては岡山市を毎年のように訪ね、万成石に向かい制作していた。この事実を掘り起こそうというのが、いま私が進めている研究である。

一生を通じて多くの人の知遇を得、活躍の場を広げたノグチ。私の調査もまた、彼が岡山で知り合った人々を訪ねることから始まり、いまなおその途中である。彼の交友関係は、私の予想をはるかに超えた広範なもの

で、当時を知る人々は一様に、高名な芸術家であったにもかかわらず、気さくで謙虚であった彼の面影を懐かしそうに語る。わがままでかんしゃく持ちというのが書物で知り得るノグチの性分であるが、そんな先入観はいたるところで覆されてしまった。

一体、ノグチにとって岡山はどのような場所であったのだろうか。20世紀を駆け抜けた彫刻家の岡山での表情を、彼がもたらしてくれる数多くの出会いを手がかりに明らかにしていきたい。このたび、福武文化振興財団より文化関係助成をいただくことができたのは、私にとって大きな励みとなった。研究の成果を深い感謝の意にかえてお伝えできるように、気を引き締めて取り組む決意である。



イサム・ノグチが石材を選んだ場所での調査